

蕪村と近・現代詩

——田中冬二の場合——

深澤 忠孝

- はじめに
- 一 蕪村と萩原朔太郎
- 二 萩原朔太郎と田中冬二
- 三 冬二の詩の展開と俳句
- 三―(一) 短詩と短章集
- 三―(二) 詩と俳句
- 三―(二)―1 内接の関係とその変型
- 三―(二)―2 外接の関係とその変型
- 三―(三) 自作句を含む詩
- 三―(四) 蕪村句を含む詩
- まとめ

○ はじめに

愁ひつゝ岡にのほれば花いばら

蕪村

エスケープして来し丘の花菱

冬二

この二句に、蕪村と冬二の関係がよくみえる。芭蕉の「世にふるもさらに宗祇のやどり哉」の、宗祇と芭蕉の関係を思わせる。

梅若菜まりこの宿のとり汁

芭蕉

梅咲ぬわれらが宿のとり汁

蕪村

卯の花や鞠子の宿の野老汁

冬二

芭蕉の句から冬二の句まで約三百年、伝統というものの一つの典型といえよう。さらにこういう例もある。

此道や行人なしに秋の暮

芭蕉

門を出れば我も行人秋のくれ

蕪村

門を出て故人に逢ぬ秋暮

〃

蕪村の二句は、周知の表裏の関係にある句。これらに見合う冬二の句はない。しかし、冬二の第一句集は『行人』である。このネーミングに芭蕉・蕪村の句が下敷になっていることは疑いえない。

冬二の最晩年の詩に「秋の或る一日に」がある。その第一行は送り仮名は多いが、蕪村の句そのままである。

門を出て故人に逢ひぬ秋の暮

蕪村のこの句が潜在意識にあったのか

秋の暮ならぬ秋の日の昼下り

私は町の辻でひとりの故人に出逢った

そのひとは私を伴ひ近くの御菓子司と書いた看板の下った店へはひると

菓子の一折を買ってくれて外へ出ると

振りかへりもせずさつきと立ち去って行つた

見覚えのある面影であるが思ひ出せない

そのかみ親灸し敬慕した人であることは確かだ

しかし私はそのひとを思ひ出さうと思はない

その方が返ってペーソスがあり浪漫的であるからである

（『書燈』昭54・11）

冬二が天寿を全うしてこの世を去る半年前の八十四歳時の作、さすがに想像力、緊張感の弛緩、集中力の減退は隠せないが、それでも鑑賞には十分たえよう。さらに冬二には次の句があつて、「故人」の謎解きをしてくれる。

芭蕉忌や野路の時雨といふ菓子を

また「芭蕉と蕪村への敬慕」という文章もあつて、「故人」が蕪村であることが知られる。つまり、蕪村が「芭蕉忌」に「野路の時雨」という菓子を「私」に買ってくれて、そのまま立ち去ったというドラマを作りあげている。この手法は冬二が得意とし、かつ冬二にとって重要な手法の一つであるが、今は冬二が持つ信仰にも近い蕪村敬慕の一例としての指摘に留める。

わが国の近・現代詩史において、その源流を蕪村に求める視点が、ようやく一般化してきたが、奔流もあれば淀みもある。例えば、島崎藤村が「北寿老仙をいたむ」を下敷に「炉辺」を、「春風馬堤曲」から「敷入」や「望郷」(後「響きりんく音りんく」)を発想したことはすでに先学の指摘するところであるが、結果は、蕪村俳詩の近代性もリアリティも越えられなかった。

現在刊行中の『蕪村全集』(平4)、講談社の刊行の辞に、蕪村の「芸術的生命は」「近代の芸術的創造と深くかわりつつ、今も生き続けている」とあり、十三人の文芸関係者をあげている。詩人では、野口米次郎、萩原朔太郎、三好達治、田中冬二、安東次男である。藤村はあがっていない。

田中冬二があげられるのは当然だが、どういう視点であげられたのかは分らない。冬二は一口に「都会に住む田園詩人」(堀口大学)などといわれ、広く信じられているようだが、そう単純な詩人ではない。

本稿では冬二が、どのようにして蕪村に接近し、摂取、同化、創造というプロセスで自らの「芸術的創造」に生かしたのかを、なるべく作品に即して考察する。さらに冬二が試みの先に見据えていたものにも触れる予定である。

一 蕪村と萩原朔太郎

蕪村と萩原朔太郎といった時、朔太郎側からは、当然『郷愁の詩人と謝蕪村』（昭11）が浮かぶ。明治大正の『蕪村研究資料集成』全十七巻（平2）が出、現在、全十巻の新しい『蕪村全集』が刊行中（講談社）である。蕪村研究はさらに進むであろうが、現時点でこの朔太郎の論考はその生命を喪っていない。

獺祭屋主人（子規）の『俳人蕪村』（明32）を改めて読むと、あの時期これだけ精細な研究があつたことに驚くが、問題は多々ある。先学の指摘では、子規が蕪村を写生、客観の人と捉えたのが根本的な誤りだという。朔太郎の子規批判もこの点に集中する。子規の蕪村研究が、まさに自分達の主張、写生主義の砦を構える感あるのを痛烈に批判しているわけである。

蕪村を誤った罪は、思ふに彼の最初の発見者である子規、及びその門下生なる根岸派一派の俳人にある。子規一派の俳人たちは、詩からすべての主観とヴィジョンを排斥し、自然をその「あるがままの印象」で、単に平面的にスケッチすることを能事とする、いはゆる「写実主義」を唱へたのである。（中略）かうした文学論が如何に浅薄皮相であり、特に詩に関して邪説であるかは、ここで論ずべき限りでないが、とにかくにも子規一派は、この文学的イデオロギーによって蕪村を批判し、かつそれによって鑑賞したため、自然蕪村の本質が、彼等のいはゆる写生主義の規範的俳人と目されたのである。

（中略）僕の断じて立言し得ることは、蕪村が単なる写生主義者や、単なる技巧的スケッチ画家でないといふ

ことである。反対に蕪村こそは、一つの主観を有し、アイデアの痛切な思慕を歌ったところの、真の抒情詩の抒情詩人、真の俳句の俳人であつたのである。

〔郷愁の詩人と謝蕪村〕

朔太郎はこう断言し、その「主観」を「詩人蕪村の魂が咏嘆し、憧憬し、永久に思慕したアイデアの内容、即ち彼のボエジイの実体」を規定して、「それは時間の遠い彼岸に実在してゐる、彼の魂の故郷に対する『郷愁』であり、昔々しきりに思ふ、子守唄の哀切な思慕であつた」と結論する。『郷愁の詩人』という所以である。そして蕪村の形象が達成した世界を三点に整理、例句をあげた。表記は同書のまま（○印は、後に冬二がしばしば引用した句）。

1. 浪漫的の青春性に富んでいること

○遅き日のつもりて遠き昔かな

春雨や小磯の小貝ぬるるほど

行く春や逡巡として遅桜

歩行歩行もの思ふ春の行衛かな

○菜の花や月は東に日は西に

春風や提長うして家遠し

行く春やおもたき琵琶の抱ころ

2. 春怨思慕の青春的センチメントのあること

○春雨や同車の君がさざめ言

白梅や誰が昔より垣の外

妹が垣根三味線草の花咲ぬ

恋さまざま願の糸も白きより

○二人してむすべは濁る清水かな

3. 色彩が明るく光が強烈で印象的西洋画風

陽炎や名も知らぬ虫の白き飛ぶ

更衣野路の人はつかに白し

絶頂の城たのもしき若葉かな

○鮎鮎や彦根の城に雲かかる

○愁ひつつ岡に登れば花いばら

甲斐ヶ嶺や穂蓼の上を塩車

明治から昭和初期までの蕪村研究史において、朔太郎の批評、評価は画期的なものであった（冬二は本書に強く影響された、後述）。

朔太郎は、子規は単純皮相としか思えない写生主義を奉じたために、ついに蕪村の本質には至らなかったという。朔太郎が、俳詩「北寿老仙をいたむ」であげた近代性も、右の三点に集約される蕪村句の本質も見えなかった、という。

また蕪村は、朔太郎もいうように不遇な詩人であった。子規らの誤った評価の一方で芭蕉と比較され、とても芭

蕉には及ばないとする単純さで決めつけられてきた。そこでは、俳諧中興、蕉風再興の功績さえ見捨てられた感もあった。

子規から約四十年後が朔太郎の評価である。先に画期的といったが、朔太郎の評価にも難点があった。例えば暉峻康隆はこういう。「蕪村の近代性、本質的に近代西洋の抒情詩とも共通している浪漫的な青春性は、萩原朔太郎の詩的直感によってみごとに浮彫にされたのであるが、しかしそれがあくまで直感的把握の域にとどまってるのは、やむをえざる詩人の宿命」(『蕪村論』)であったと。詩人としての朔太郎の限界がそこにあったにせよ、子規らの蕪村評価の枠を破り、その発句、俳詩の情感豊かな抒情性、近代性をポエジイとしてよみがえらせた点は、いかに強調されてもよいはずである。さらに「春風馬堤曲」を積極的に評価していることも含めて、俳句(発句)も詩一般と同様、ポエジイとその形象性において評価するという、普遍的な詩論を自立させたことでもある。

この朔太郎の所論(『生理』掲載時も含め)に導かれて蕪村に接近し、摂取、同化、創造のプロセスで自らの詩的活動を展開していくのが、一九三五年(昭10)前後からの田中冬二であった。

二 萩原朔太郎と田中冬二

朔太郎と冬二、この全く異質の詩的活動を展開したと考えられる二人の詩人は、意外に近しいのであった。現代詩の抒情の本流ともいえる詩誌『四季』同人として数年間一緒になる以前から、第一書房発行の著者として、昭和初期から交流があり、冬二側は詩を書き出した前後(大10)からの朔太郎の愛読者であった。

大正十二年、萩原朔太郎のあの有名な「青猫」が新潮社から刊行された。その「青猫」を関東大震災で焼失した私は、早速牛込矢来の新潮社へとんでゆくようにして、それを求め安堵した。それほど私は「青猫」に執心していたのである。

（「初心忘るべからず」）

冬二は前年の一九二二年（大11）八月、安田銀行銀座支店に転勤していたが、大阪支店在任中の四月、初めて『詩聖』に投稿した詩「蚊帳」が載った。それは投稿作品の扱いにありがちな差別的なものではなく、三木露風、佐藤惣之助、土田杏村、野口米次郎、尾崎喜八、水野葉舟、川路柳虹、茅野蕭々、河井醉茗といった錚々たる面々と、全く対等の扱いで、玄文社の編集担当、長谷川巳之吉の推挙によるものであった。長谷川は間もなく第一書房を興し、冬二の第一詩集から第三までを世に送ることになるが、このことは銀行員としての勲章にはならなかったが、詩人を志した者にとっては、大変な幸運であった。長谷川は銀行に冬二を訪れて、激励するようなこともあったという。

このような時期、すでに冬二が『青猫』に執心していたということは、大いに注目してよいことである。

銀座支店に転勤して間もなく、冬二は俳句にも手を染める。安田平安居（善次郎四男、冬二も善次郎の血筋）の「水無月会」と上林白草居の『草』によってである。「水無月会」は平安居の震災死によって途絶、その後は白草居が安田銀行の調査課長代理ということもあって『草』に深くかわかり、同人ともなっている。しかし、まだ蕪村の影は見えない。

朔太郎がいわゆるアフォリズムや各種のエッセイを積極的に発表し始めるのはこの頃からで、アフォリズム第一集『虚妄の正義』が第一書房から出たのは一九二九年（昭4）十月、冬二の第一詩集『青い夜道』の二か月前であ

る。

冬二は『虚妄の正義』の書評を書いている。「ゲルマン風の意匠——萩原朔太郎『虚妄の正義』」がそれだが、初出は現在までのところ不明である。後の詩文集『妻科の家』（昭45）に収められている。

私はこのアフォーリズム集に或は共鳴し、或は多少の疑問を持つが総じて心ひかれる。五月の鯉の吹き流しのように、すっきりしていて快いものを感じる。私はまたこの書の装幀が大好きである。萩原さんは十二頁で「装幀について」として次のように書いて居られる。——従来自分が意匠したものに詩集『青猫』が一冊ある。この書物には『青猫』以後初めて意匠してみた——と。（中略）

その黄色い表紙には独逸語で篇中の一章「歯をもてる意志」——意志——そは夕暮の海よりして、鱧の如く泳ぎ来り、歯を以って肉を噛みつけり——とある。

（『妻科の家』）

冬二が『四季』に初めて作品を発表したのは詩「銀行」、一九三五年（昭10）十月である。それが「銀行」という仕事に関する詩であったことは興味深い。朔太郎は「断章」（アフォーリズム）「恋愛の困難に就いて」他五章である。朔太郎は同人として創刊（昭9・10）以来、精力的に「断章」を発表していた。

さらに重要なのは、朔太郎は同時期、個人雑誌『生理』（昭8・6・12・10）を出し、「郷愁の詩人と謝蕪村」を発表し続けていたことである。その（五）まで連載して本誌は終刊する。つまり『生理』は、朔太郎が「郷愁の詩人と謝蕪村」のために作った個人誌であったといえる。

冬二が『生理』を読んでいた、という確証はない。しかし俳句に手を染め、発表し始めた（『セルパン』昭7・9）

一年後であり、朔太郎に『青猫』以来執心し、ついで先の「ゲルマン風の意匠」を書いた後である。読んでいた可能性は十分ある、といっている。

単行本（昭11・3、第一書房）は確実に読んでいる。おそらく寄贈されていた。というのは前半、やはり第一書房から出た『絶望の逃走』は署名、献呈されているからである。

私は冬二の蕪村への接触は『生理』により、あるいは『郷愁の詩人と謝蕪村』によってとみる。双方の確率が高い。単行本には「芭蕉私記」も収められていたから、当然、芭蕉にも、ということになる。

朔太郎が死んだ時、『四季』は追悼号（昭17・9）を編んだ。すでに同人になっていた冬二は散文詩風の「八木節の思ひ出」を書き、その死をいたんだ。

檣頭の灯は消えた――

萩原さんが逝かれて以来、そんなさびしい気がしてゐる。

予て御病氣静養中とは聞きながら、こんなことがあらうとは思ひもかけなかった。

一度信州のしづかな山の湯へ御案内致し度い等ともひとり思つてゐたのである。

虚妄の正義、絶望の逃走、御愁の詩人と謝蕪村、古く青猫其他萩原さんの著書を取り出して在りし日の萩原さんを忍んでゐるが、忍べは忍ぶ程その逝去が痛惜される。

虚妄の正義等装幀を見ただけでも萩原さんの激情が感じられる。

態々私の名宛まで書いて贈られた絶望の逃走は今私にとつてのさびしい形見となつてしまった。

続けて冬二は、朔太郎と渋谷で会食した時のこと、中野、新宿の居酒屋でのことを書いている。中に「海鳥、笛の里へ行かうよ、波宜亭、新前橋駅前、国定忠治の墓、等が好きですといふと、萩原さんは、——氷島の中の地下鉄^{きぼう}にては好いだらう」を繰り返したという一節がある。その対話が後に、冬二の次の詩を生んだ。

清水峠を越えると 上州は月夜——有明月夜であつた

桑畑の桑のほぐれてまもない うすい黄みどりの嫩芽が

月明りにぬれたやうにしつとりとしてゐた

水上 沼田 渋川 列車は快速に走つた

やがて群馬総社 新前橋だ

ああ群馬総社 新前橋

私は古びたインバネスの萩原さんの姿を思ひ浮べた

——ねい いいだらう なに幻影の後尾燈

後尾燈は恋人にかけてあるんだよ

田中君 いいだらう

ささやかなレストランの夕暮

食卓に私と相向ひ合つた萩原さんは

皿のハンバクステーキにナイフとフォークを使ひながら

「地下鉄^{きぼう}にて」といふ詩について

そんな風に親しく語られたのだ

〔「上越線にて」部分『晩春の日に』〕

冬二の朔太郎への執心、敬慕はかくの如きものであった。その詩人の蕪村論もまた熱心に読んだに違いない。このことは、冬二の次文章によっても確かめられるように思われる。

見よ。かつての自称高踏的、苦悶の象徴今何処に。新しき革襄に盛られるとも今日の酒は明日の酢である。

不朽のものこそ永遠に新しいのである。（中略）

芭蕉や蕪村に今日の詩人俳人も及ばぬフレッシュな感覚が随所に見られる——外国文学の影響など絶無の時代に。今日は反って外国文化が、日本人の持つ固有の日本の詩的精神の発芽を妨げてゐるとも見られる。前述の超現実主義謳歌の連中もその一例である。

〔今日の酒は明日の酢である〕

初出は『俳句新聞』かと思われるが不明である。しかし冬二はこのスクラップを大切に保存していたから、自ら重要と認めていたのであろう。初めての詩論であり、冬二理解に欠かせない一文である。全集は「昭和十年頃」としている。

右の文章には、明らかに朔太郎の『郷愁の詩人と謝蕪村』の影響がある。書き出しは「今日は詩と俳句が隣りあつてゐる。／＼しかし隣と云つても、それは田舎の隣りである。相隔ること遠いのである」で、詩と俳句を併立させ、ポエジイの本質は同じであるという捉え方や外国文学と関係などは、朔太郎の認識と論法そのものである。

いずれにせよ、冬二は朔太郎によつて蕪村に目覚めた。朔太郎が蕪村を「オルゴール」の比喻で捉えたのに対し

て、冬二は「サングラス」で捉えたあたりにもそれは認められる。

三 冬二の詩の展開と俳句

冬二の半世紀を越える詩的活動を私はかつて、八期に分けて考察した（全集、一・二巻解説）。今は七期で考えているが、基本的な変更ではない。一覽表風にして考察に備える。

- I 詩集『青い夜道』（昭4）『海に見える石段』（昭5）
- II 詩集『山嶋』（昭10）『花冷え』（昭11）
- III 詩集『故園の歌』（昭15）『橡の黄葉』（昭18）『菽麦集』（昭19）
- IV 詩集『山の祭』（昭22）『春愁』（昭22）『山国詩抄』（昭22）句集『行人』（昭21）随想『三国峠の大蠟燭を偷まうとする』（昭22）
- V 詩集『晩春の日に』（昭36）随想『山と高原をゆく』（昭30）
- VI 詩集『牡丹の寺』（昭39）『葡萄の女』（昭41）『失われた簪』（昭47）句集『麦ほこり』（昭39）『若葉雨』（昭48）詩文集『妻科の家』（昭45）詩文集『奈良田のほととぎす』（昭48）
- VII 詩集『サングラスの蕪村』（昭51）『織女』（昭53）『八十八夜』（昭54）句集『春愁』（昭51）『田中冬二句集』（昭55）

第二詩集『海の見える石段』から短詩が多くなり、俳句の影響が表れ始めるが、より自覚的になるのは第三詩集『山鳴』からである。以後、年を追ってその相関は深まり、その中心に蕪村がいた。

三―(一) 短詩と短章集——モダニズムの影

短詩は原則として三行以下の詩、短章集とは一・二行の短章を数章以上纏めた作品とする。詩史的には詩誌『亜』(大13・11～昭2・12)の運動とその成果がすぐ想起される。

牝 鶏

枯野の軍隊

雀

いつも曇天の衣裳をつけてゐる

右二篇は同誌八号の安西冬衛「村のエスキース」からの抄である。外には北川冬彦、滝口武士らが、強力にそれを推進した。詩集としては冬彦の『検温器と花』(大15)『軍港』(昭4)、冬衛の『軍艦茉莉』(昭4)などがあり、詩誌『詩と詩論』(昭3・9～6・12)の運動等とも相まって非常に注目された。特に注目されたのが『軍艦茉莉』である。

春

てふてふが一匹韃靼海峡を渡って行った。

秋

横町一杯の鰯雲

あの邸の開いたことのない鎧屏よろいど

等が新鮮な衝撃力となった。冬二も大変注目して「この『軍艦茉莉』に関し当時私は第一書房の『セルパン』に絶讃の辞を書いた」「(初心忘るべからず)」。冬二の文章に直接当たすることは出来なかったが、これらが冬二に短詩、短章の一つの契機を与えたことは間違いないところである。

もう一つ冬二に手掛りを与えたのは、朔太郎のアフオリズムだと私は考えている。朔太郎は実に多くのそれを書いており、冬二は熱心に読んでいた。今、改めてそれらを読んでも、一行や短章がかなりあり、実に示唆的である。例えば『絶望の逃走』の中からも、

父

父は永遠に悲壮である。

敵

敵は常に哄笑してゐる。さうでもなければ、何者の表象が怒らせるのか！

等があげられるし、「耳——山の中腹に耳がある」（アフォリズム拾遺）等となると、十分に抒情的でもある。

冬二は第一詩集『青い夜道』について、誰の、あるいはいかなる方法の影響も受けていないとことさら強調している（「立春から雨水に」）が、そこには永井荷風の『珊瑚集』（大2）や堀口大学の『月下の一群』（大14）の影響歴然たるものがある。

冬二の短詩、短章は第二詩集『海に見える石段』、第三詩集『山鳴』から頻出する。これらが『亜』を中心とした短詩運動やモダニズム、『詩と詩論』のレスプリ・ヌーボウ、朔太郎のアフォリズム集等と無関係だとは、とても考えられない。

冬二が詩集以前、初めて短章集を発表したのは、一九三二年（昭7）七月の『文芸汎論』で『悪の華』の表紙に——詩抄——がそれで、「二行詩の試み十三篇」ともある。

塩鮭 石油色 樺太の地図

紫蘇 朝焼の空

薄荷菓子板 氷滑大会場

煙草の花 瀟洒な夏服の女学生

これらに冬二らしさを求めるとすれば、すべて名詞、名詞止めの短句で、それぞれ明確な季節感をもっていることであろう。季題性といってもいい。これらは冬衛にも冬彦にも朔太郎にもなかった。『海に見える石段』の短詩になると、さらに色調が印象的になる。

秋

ランプの火屋に 白い障子が映つてゐる

川治温泉

秋の囀に鶴を何羽も飼つてゐる

手巾

新しい手巾をたたみながら

ふとキリストの最後の晩餐をおもひ浮べた

時代の刺戟や影響を受けながら、冬二独自の世界を拓き始めている。そのためには方法が重要なことはいうまでもない。冬二が心にとめていたのは「俗を離れて俗に帰る（俗を用ゆ）」という、蕪村のいわゆる離俗論であった。さらには「サンガラスを掛けた蕪村」を心に住まわせることであった。

冬二の短章集を代表するのは、第三詩集『山鳴』の「故園の萊」である。「僅かその一行か二行の中に、私は如何

にきびしく、純粋なイメージを追ったか。こうした短いものにあつては、センスがただちにイメージであり、イメージがまた最もフレッシュなセンスである。センスが直観的にイメージを描かせるとも云えよう」「立春より雨水に」と冬二はいうが、これはまさに俳句作法の一つでもある。『故国の菜』に冬二は、かなりの自信を持っていた。

味噌　うす暗い土蔵の中　味噌桶　むかしがゐる

茶　ものうい晩春のゆふぐれよ

醤油　日が暮れると田舎の町は真暗だ

さうめん　広重の海に雨

しその葉　母の手

豆の花　青大豆よみのれ　草菜の家　菽水の観あり

このような二十二章を合わせて一篇の詩だとするのであるが、従来の詩の定義や常識では考えられないことであった。先にも触れたようにここには、モダニズムやシュールの方法に一脈通ずるものがあるが、冬二らしき、冬二の独自性があるとすれば、それは何より季節感であり、その俳諧（連句）的展開であろう。以下、その題目だけを示す。さながら季題集である。

山葵・柘榴・竹麦魚・岩魚・麴・無花果・ゆずの木・麻・菊・綿・うど・水蜜桃・角砂糖・アップルパイ・葡萄酒。

三―(二) 詩と俳句——モチーフ・主題・形象

嶋岡晨は冬二と室生犀星の俳句は、オプチミズムだと言っている（『詩のある俳句』飯塚書店 平4）。どう規定しようとする研究者の自由だが、その所論には納得しかねるものがあつた。レッテル貼りの感もある。

冬二は確かに「私はこれまで俳句を詩作の側、時にそのデッサンとして試作してきた」（『行人』あとがき）と言っているが、本音ではなさそうである。それは後の引用等からも言えるし、右の言葉は詩人の謙虚さ、俳句関係者からもすでに詩人と目されていることを意識して、遠慮がちに言つたのであろう。

追縋ろうとすれば、ふり放し、お出でお出でをしながら、どこまでも逃げてゆく、いまいまいたらない。あきらめて退こうとすればこんどは媚態をみせて来る。俳句はかたちこそ小さいが、幽遠なものを有し、しかも一面には極めて精細なものを有している。

〔俳句小観〕『草』昭34・6

コケテッシュな女に喩えてその魅力、本質を語っているのが面白い。四十年前の文章だが、後半には今日の世界のハイク現象を予言するような文言もある。

冬二が俳句を詩のデッサンではなく、詩と同じく自立した詩であることを自覚し、かつ創作する機会意外に早くやってきた。まだ同人とはならず、客分として参加していた『草』の吟行会（蛍狩）である。『草』のそれが、都下府中の西藏院で行われた。現在の府中市の南部、多摩川に近い是政これまさにある寺である。時是一九三三年（昭8）六月、冬二はこれに参加し、次の詩と俳句をものにした。

詩 府中在にて——西藏院

お寺の暗い本堂を螢がひとつとんでゐる

句 螢狩飼屋の庭を通りけり

古蚊帳を蚕棚にかけし飼屋かな

麦秋の雨のやうなる夜風かな

一つの体験、モチーフを二つの詩形で表現したわけである。両者の成立の前後関係を問うようなことはあまり意味がない。二つの詩形に形象したことが重要なのである。この詩と俳句には主題にも形象にも直接繋るものはないが、この体験が冬二に詩と俳句の関係を考えさせる契機になったことは想像に難くない。

この双方の自立からやがて関係づけが試みられ、さらには句をすっぽりと詩に取り込むという方法、段階から、最終的には大胆にも蕪村句を取り込んで詩を成立させている。「はじめに」で引用した「秋の或る一日に」もそうである。これもまた、冬二の独自の方法であった。

三―(二)― 内接の関係とその変型

幾何の概念を借りて考えることにしたい。俳句が俳句として自立してある一方で、詩がその句の主題やイメージを内側に取り込んで成立している場合である。こういう概念化には危険も伴うが、それも恐れず単純化して描くならば、詩という円の中に俳句の小さな円が内接した図柄となる。何より具体的に作品に即してみよう。

詩

アメリカ村

ジャムを煮るにほひがしますね
あけつぱなしで ヴェランダに

日本の赤い提燈をともした家

きれいな若い婦人があみ物をしてゐる家

トルストイにたおぢいさんよ

裏のパセリの畑で 料理人の吹いてゐる

日本の笛はかなしいですか

小さい昆虫学者たちは

街燈にあつまる虫をとつてゐます

コルシカ松の鉢は外へだしました

ほんとに白いワイシャツに

シャンパン酒のやうな夜ですね

ジャムを煮るにほひがしますね

（『青い夜道』）

句 紅白の堤燈ともすキャンブかな

（『行人』）

詩集と句集には十七年の隔りがある。それは制作時期とは無関係である。前後関係でもある。おそらく詩が先に

作られたのだろうか。

冬二には、日本の伝統を愛しつつも西洋（特に北欧）への強い憧憬がある。立教中学というミッション校、その学校があつた明石町が育んだものである。当時、明石町は東京の中の西洋の感があつた。外国人居留地、三一神学校、メトロポール・ホテル、聖路加等々、現在もその名残りがあつた。

立教中学を出るとすぐ、冬二は第三銀行（後・安田、現・富士）に入り、半年程の研修・試傭を経て今市支店（出雲市）へ赴任、そこで三年余を過ごす。この間に冬二は「アメリカ村」を訪れ、取材したという。アメリカ村というのは各地にあつたようだが、ここは「御殿場の西南箱根への乙女峠の真下に近い処」「このアメリカ村を取材したのはもう六十年も前のことだ」（『書燈』昭50・8）、そして「アメリカ村の若葉の夜」という長い散文も書いた（『半世紀前』）ともいう。一九一七年（大6）夏のことだというが、その散文は残っていない。残っていれば一つのモチーフが詩、句、散文と三位一体の形象ということに興味深いところである。（この形態は冬二が憧れた飛驒に関してはいくつも例がある）。

この場合の内接という意味は、詩の対話体を通して描かれたある生活空間に、俳句の空間がすっぽり収まっているということである。詩の主題は憧憬であるが、俳句では憧憬は底に沈められて紅白の提燈を核に点景として描かれる。まだ蕪村にのめりこんではいないと思われる時期だが、あるいは蕪村の「てうちんでなを哀也寒念仏」等の句がヒントになっているかもしれない。

ことさら秀句とは思えないが、蕪村風の色調や華やぎはある。ともあれ、第一詩集からこういう関係が認められるのは極めて貴重である。この系列の作品はかなり多い。以下列挙するが、詩は題にとどめた（拾句は拾遺句、拾詩は拾遺詩の意、筑摩版全集による）。

詩 「麻」(「故園の萊」の一章)

句 焼ヶ岳にけむりのたてり麻を刈る

『山嶋』

「拾句」

詩 「白玉」(「故園の萊(二)」の一章)

句 白玉や遊女屋の昼閉ざしつつ

『橡の黄葉』

『行人』

詩 「鮎鮎」(同右)

句 鮎鮎の夢の葉すこし乾きたる

『行人』

詩 「薄暑の軽井沢」

句 A サングラスかけて薄暑の軽井沢

『晩春の日に』

『麦ほこり』

句 B サングラスはづし浅間の煙を見る

「拾句」

詩 A 「秋の風」

詩 B 「秋風」

「拾詩」

『失われた簪』

句 A 秋風や山窩の女簀を編める

『若葉雨』

句 B 秋風や山窩の女の見さびし

「拾句」

詩A 「信州佐久」

『織女』

詩B 「魚狗」

『八十八夜』

句 魚狗来醬油つくる頃なれば

『若葉雨』

詩A 「秋の風」 以下は変型である。「信州佐久」を例に考察してみる。

詩A 信州佐久

魚狗が来て醬油をつくる頃の佐久

蓼科は小梨の花ざかり

郭公がないてゐる

詩B 魚しょう 狗びん

魚狗が来る頃 醬油をつくる信州佐久

蓼科は小梨の花ざかり

句 魚狗来醬油つくる頃なれば

制作、発表の順序は、句―詩A―詩Bである。魚狗（かわせみ）がやってきた、ああ 醬油をつくる頃になった

のだ、という句だけでは、そういう習慣をもない地方の人々にとっては感動はない。詩A・Bには二つの固有の地名があり、すつと引き込まれる。イメージも湧く。地名の力というものを強く感じる。

詩Aはおそらく、句を解体、散文化する形で成立したのであろう。しかし「郭公」までオマケして作りすぎ、説明しすぎに気づいて詩Bとなったと考えられる。Bは焦点化である。つまり郭公が削られて「魚狗」に焦点があてられている。題名もそうなっている。

句を離れてAが成立し、Aから句に近づいてBが成立したというこの関係は、句とのツキとハナレということを考えさせる好例である。

図示するとすれば三つの同心円、もちろん句が真ん中である。

三―(二)―2 外接の関係とその変型

これはモチーフは共通でありながら、異なる主題で詩・句が自立している関係である。

詩 池鯉鮒ちりふの女

しどけなく寝転んで春本を見てゐる女

植付のすんだばかりの裏の田圃から

懶い昼蛙の声

名物 卯の花焼 木の芽田楽 鱈斗

女の蹠あなうらがほんのりさくら餅の色だ

『葡萄の女』

句A 霞切や昼を酒酌み痴けたる

句B 春本を読みすて昼寝行々子

句C しどけなく昼寝の女行々子

『麦ほこり』

「池鯉鮒」は現在「知立」と書く。東海道五十三次の宿場、岡崎と鳴海の間。冬二は名物として食物ばかりをあげているが、江戸時代は街道一を誇る馬市が有名であった。さらに古くは八ツ橋と燕子花、例の『伊勢物語』の東下りの一背景である。こうした豊艷な女の歴史も古かったのであろう。

句には行々子（よしきり）が共通しており、あのけたたましい鳴声とけだるそうな女の昼が対照的だ。句Aは主語を「女」と考えれば関係するが、「私」なり「男」とすると別のことになってしまう。蕪村は主語を明示しない方法を意識的にとったが、それを冬二はこんな風に生かしている。冬二の意識的方法である。

これらの詩・句は、もとは冬二の無二の親友、近江の詩人井上多喜三郎に私信として送ったものだが、井上がある宴席で曝露するような形で発表して一座をわかせた。

その後若干の手が入っているかもしれないが、なかなかの出来だし、むしろ名人芸を思わせる。冬二の七十五歳前後の作、そのエロチシズムに驚かされる。この点ではまぎれもなく蕪村を越えている。

「蹠がほんのりさくら餅の色だ」というみごとな表現で、すぐ想起される詩がある。安西均の「常陸の女」である。期せずして一行詩であるが、これは「ひとづま抄」六篇中の一篇。

わが恋は 蹠あなうらの 餅たこ 如ごと

安西均は冬二が日本現代詩人会長の時の理事長、俳諧の造詣も深く、作句も連句の座も楽しんでいた。日本古典を素材にみごとな現代詩を書き続けた詩人、昨年、全詩集（花神社）が出た。
この系列に属するのは、次のような作品である。

詩 「霜の降りる夜」

『花冷え』

句 鮭盗むきつねの罌のかけてあり

『行人』

詩 「山の見える庭に牡丹の花を剪る」

『山の祭』

句 A 門前は水田ひろがり牡丹寺

『麦ほこり』

句 B 牡丹剪る遠山脈に残り雪

〃

句 C 牡丹剪る愁ひ心をのこしつつ

〃

詩 「溪流」

（「詩はかく味わってほしい」『教室の窓』東京書籍 昭41・5）
句 月見草早瀬にひとり髪洗ふ 「拾句」

詩 「春の近い晩に」

句 裏口に誰か来て居る宵の春 「織女」
「麦ほこり」

次はこの型の変型である。

詩 釜無の古宿

ざらめ雪降りつつ昼の月あり
釜無の古宿 鳶木
家々は白き障子をたてつめ
柿並木に甲州丸の一つのこれり

『晩春の日に』

句 A 釜無の鳶木の宿の蛍かな

『麦ほこり』

句 B 釜無の鳶木の宿の柿若葉

『若葉雨』

句 C 釜無の鳶木の宿の柿並木

「拾句」

句Cは無季であるが、詩との関係で読めば冬である。冬二はこの不徹底さを嫌って句集には収めなかったであろう。同じ場所の夏と冬の句、これらには蕪村の次の二句の示唆があったと思われる。

茂山やさては家ある柿若葉

蕪村

茂山やさては家ある柿もみぢ

〃

「蔦木」は甲州街道の宿場、八ヶ岳の麓で柿の多いところ、現在はさびれているが、まだまだ江戸の名残りがあって旅愁を誘う。冬二は安田銀行諏訪支店長時代、しばしば訪れたようである。

外接の関係と図型的に理解するとすれば、大きめの詩の円に小さい句の円が外接する、変型（釜無の）の場合は、句ABCが三角形的に外接し合い、句Cの円に詩の円が外接するという形になる。

三一(三) 自作句を含む詩

詩・句一体の試みである。自作句を含む詩は、蕪村句を含む詩より十年早くから発表されている。詩と句の関係は総じて複雑である。それだけに冬二における詩と句の関係を、深いところで示していることになる。

詩A

夕方から雨になった 菊の雨の匂いをさせて

——清水を祇園へ下る菊の雨

『サンングラスの蕪村』

詩B 菊の雨

清水を祇園へ下る菊の雨

紅殻塗のれんじ格子の家の入口に
鉢植の白菊が雨に濡れてゐた

『葡萄の女』

詩C 菊の雨

清水を祇園へ下る菊の雨

紅殻塗りでれんじ格子のある家
入口近く 鉢植の白菊の花が
雨にぬれていた

奥の方に三味線がきこえた
耳をすますと

それは泉鏡花の
滝の白糸であつた

「拾詩」

句 清水を祇園へ下る菊の雨

『麦ほこり』

制作の順序は、詩A―句―詩B―詩Cと推定されるが、発表は詩Aと句が逆になっている。詩B（初出『日本海溝』昭55・1）と詩Cの間には、十五年の隔りがある。

こう並べて気付くのは、句の燦然たる自立である。四回出てくるが、全く異同がない。閑寂な時間と空間がみごとに焦点化されている。詩のデッサンとか詩人の余技とかとは、とてもいえないであろう。

句の自立のためには、清水、祇園という京の名所、その歴史の深みによるところもあるが、さらには蕪村の句の世界、与謝野晶子や吉井勇の歌の力もあずかっているよう。

清水へ祇園をよぎる桜月夜今宵逢ふ人みな美しき

晶子

季節と詩人の行動は全く逆だが、このあまりにも膾炙された歌が、冬二の句とダブルイメージされる形で句の印象を強めている。

菊の香や月澄霜の煙る夜に

蕪村

祇園会や僧の訪よる梶がもと

〃

白菊の花一輪といふべかり

〃

蕪村のこれらの句や晶子の歌が冬二に意識されていたことはほぼ間違いないが、それにしても冬二の句は自立している。詩群に比して、はるかに結晶度は高いといえよう。

詩の方は作られすぎ、いかにも作られた物語という印象が強い。特に詩Cがそうだ。このことがこれを詩集に収めさせなかったのであろう。冬二も十分自覚していたのである。

詩A

自らに 木の芽雨ききつつひとり眠らなん
ひとに 暖かき雨をききつつ眠らずや 『サングラスの蕪村』

詩B 春

木々の芽のけむっている雨
暖い雨 木の芽雨だ
菜種の花が咲き河豚料理の季節もすぎた
雨は夜になっても降っていた
その雨をききながらあるひとに書いた
木の芽雨ききつつひとり眠らずや 『失われた簪』

句A 木の芽雨ききつつひとり眠らなん

『若葉雨』

句B 木の芽雨ききつつひとり眠らずや

「拾句」

句C 木の芽雨すべてを忘れ眠らなん

〃

これも複雑な関係にある。発表の順序は、句B―詩B―句A―句C―詩Aであるが、それが制作の順序とは考えられない。詩Bとの関係で、まず「眠らなん」系を措くとすれば、詩A―句B―詩Bの推定は可能であるが、順序性の決定はあまり意味がない。何よりもここでは、冬二が意図した艶めいたロマンを読むべきであろう。その点では断然、詩Bが印象深い。事実や体験から発想しつつも、想像力によって浪漫的な物語世界を構築するのは、冬二の得意とするところであった。

この類型には、外にそのような作品がある。

詩 「八十八夜」

「拾詩」(『書燈』昭53・4)

句A 種播いてやすけき夜なり遠蛙

『麦ほこり』

句B 種播いてやすけきゆふ雨となる

『若葉雨』

詩 「晩春から真夏へ」

「拾詩」(『書燈』昭54・7)

句A サングラスかけて薄暑の軽井沢

『麦ほこり』

句B サングラスはづし浅間の煙を見る

「拾句」

「晩春から真夏へ」とサングラス二句は、三―(二)―1の「薄暑の軽井沢」と深い関係にあり、その比較検討は必須だが、今はサングラス二句が共通であること、冬二は句Aにそれほどこだわったことの指摘にとどめる。

サングラスかけて薄暑の軽井沢

さらりと爽かな句である。しかし、冬二の句中でもそう傑出した句ではない。秀句は外に多くある。

しかし、冬二のこの句へのこだわりは深かった。死の半年前（昭54・11ごろ）冬二は『俳句公論』からの寄稿依頼を受けていたが、翌年三月末の締切りまでにはとうとう書けなかった。四月四日、震える手で「軽井沢のパン」七句を書いて送った。その第一句がこれである。句集『麦ほこり』に収めていたことは、承知の上であつたろう。この七句が絶筆となり、冬二は五日後、あの世へ旅立った。

因みに軽井沢は飛騨高山と並ぶ冬二の憧憬の地で、高山が日本的風土を代表するとすれば、軽井沢は西洋のそれであつた。直接軽井沢をうたった詩・句とも各々十篇以上ある。

三―四 蕪村句を含む詩

最後は、蕪村句を含む詩である。まず、標題がズバリ「蕪村」という詩、蕪村の一句がまずは穩かに納っているという感じである。

蕪 村

このごろ私の家の食べものの買い出しには
私が行くことが多い

その日も魚屋で鯖と蛸を買ってきた

鯖は塩焼にするつもりだったが

小さくてあぶらがなさそうなので

塩焼はあきらめて味噌煮にした

ところがその味噌煮の匂いが

田舎の町の一膳飯屋を思わせて

とてもなつかしかった

時には豆腐を買いにゆくこともある

豆腐屋は坂道を下りた処

灌漑用の小川に沿い 櫟の木の下にある

私はそこでいつでも豆腐を二丁買う

豆腐を入れた鍋をさげて 帰ってくるのは

一寸恥ずかしいようでもあり 何かまた佗しい気もする

だがそんなとき私は蕪村の

——葱買うて枯木の中を帰りけり の句を思い出してすっかりうれしくなる

格別の思いを込めた作品だけに三収まである。

1. 初出 詩誌『詩洋』264号 昭46・1

2. 初収 詩集『石臼の歌』昭47・8

3. 再収 詩文集『奈良田のほととぎす』 昭48・7

4. 三収 詩集『織女』 昭53・12

『石臼の歌』は特別の詩集で、毛筆による自筆の各篇に落款を付し、それを五百旗頭欣一が木彫、木版刷りしたもので、全十五篇、うち十篇には寺田政明、富田常雄画伯の挿画があるという豪華なもの。初収は本篇のみ。

詩文集『奈良田のほととぎす』は十二篇収録、うち四篇は蕪村にかかわるもの。

1. 「鮒鮓——蕪村に関する小私見」

2. 「詩人のサブスタンス」

3. 「蕪村」（右引用の詩）

4. 「禾黍油々の日に」

詩集『織女』は第十七詩集、『奈良田のほととぎす』で確定したかに見えた本文に、さらに手が加えられた。

詩「蕪村」を発表した時、冬二は七十七歳、『織女』の出版時は八十四歳、手を入れれば入れるほど散文的になっていった。その中で蕪村の一句はさりげなく生きている。蕪村は冬二の生活現実の中で生きてきた、といえよう。

私は芭蕉と蕪村の俳句に心酔している。これこそ日本の文学として誇るべきものと思っている。芭蕉も蕪村も古人であるが、私にはそうは思われない。そのセンスのフレッシュなことは驚くべきものがある。なまじ現代の詩人などの及ぶところではない。芭蕉と言うと、ところてんを一本箸で啜っているように、蕪村と言えば草餅を摘んでいるように、人々は思うだろう。ところが元禄の世に芭蕉はプレッソーダ水をストローで飲んで

いたし、享保の世に蕪村はサングラスをかけていたのだ。その蕪村に関してだが、私は蕪村の作品の感性的で浪漫的なのがとても好きだ。そしてまたファンタスティックでカラリストなところもよい。その沢山の句の中で最も感銘しているのは、

鮒鮓や彦根の城に雲かかる

〔鮒鮓——蕪村に関する小私見〕

の一句である。

果して、予定通りとでもいう形で次の詩が現れる。因みに「鮒鮓や」の句は「禾黍油々の日」にも引用されている。

田舎の川魚料理屋にて

田舎の粗末な川魚料理屋で 私はあかるい昼をひとりで酒を酌んでいた

古びた朱塗の膳には鯉の洗いの皿と蓴菜の酢のものの小鉢があった

鯉の洗いの皿には ゆずの花が一つ妻にあしらわれていた

私はひとりと言ったが ひとりではなかった

故人がいた その故人は郷愁の詩人の蕪村であった

その蕪村が私に言った

——俳諧は俗語をもつて俗を離るるをとうとしとする 詩もまたフィクションをフィクションらしからぬもの
にすることだと

蒲焼の匂いがした

遠くで雨を呼ぶかのように蛙が鳴いていた

気がつくとうの山に蕪村の

——鮒鮓や彦根の城に雲かかる のような雲があつた。

(『織女』)

ここでは、とうとう蕪村と酒を酌み交し、対話している。その蕪村は、朔太郎が規定した「郷愁の詩人」であるが、その口から「俗離」を語らせることによって、朔太郎の呪縛を解き放つ。朔太郎には『郷愁の詩人と謝蕪村』の外、次の蕪村に関する論考があるが、ついにその俳論（詩論）に触れることはなかった。

1. 蕪村俳句のポエジイについて（『俳句研究』昭10・5）

2. 蕪村俳句の一考察（『句帖』昭12・9）

3. 抒情詩としての俳句の本質（『婦人画報』昭13・3）

冬二は、蕪村にその俳論を語らせ、それを自らの詩論とし、また蕪村に語らせるという手際を見せる。——フィクションをフィクションらしからぬものにする、これこそ冬二の浪漫詩篇の唯一の詩論であつた。

蕪村のいわゆる「離俗論——春泥句集序」は春泥舎召波と対話の形をとっている。

波すなわち余に俳諧を問ふ。

答へて曰く、俳諧は俗語を用ひて俗を離るゝを尚ぶ。俗を離れて俗を用ゆ。離俗の法、最もかたし。かの何がしの禅師が隻手の声を聞けといふもの、則ち俳諧禅にして、離俗の則なり。波頓悟す。

冬二は自らを「召波」になぞらえている節がある。八十歳をすぎて、ようやく「頓悟」したのである。最も感銘している「鮒鮓」の句を、詩において単なる比喻として使っているあたりにそのことがみてとれないだろうか。それにしても、冬二の「鮒鮓」へのこだわりは長かった。第一詩集『青い夜道』の「山へ来て」以来である。後年「近江の佳人」宇多良子との出会いがあつて、以後毎年宇多から「鮒鮓」が送られるようになり、鮒鮓は冬二のライトモチーフになった。詩には十篇以上、句は次にすべてをあげる。

鮒鮓の蓼の葉すこし乾きたる

『行人』

鮒鮓や真菰の話藺の話

『麦ほこり』

鮒鮓や檜屋と云へる古き宿

〃

鮒鮓や柿の花散りしく蹠

『若葉雨』

鮒鮓や柿の花散る蹠

『冬霞』

鮒鮓や彦根は古き城下町

〃

鮒鮓や湖水を雨の渡る見ゆ

『拾句』

鮒鮓や昼を酒酌み閑雅なる
鮒鮓や仮寝の宿り雨となる

〃 〃

この外「腐れ鮓」四句、「鮓を圧す」一句がある。冬二の全集収録句は、拾遺を含めた六五九である。一つの季題でこんなに並ぶのは外にはない。蕪村信仰はその実、鮒鮓信仰とでも言いたいほどである。この類型には外に、次の作品がある。

詩 「秋の或る一日に」

（「はじめに」参照）

句 A 門を出れば我も行人秋のくれ

句 B 門を出て故人に逢ぬ秋暮

詩 「浪漫的に」

（『書燈』昭54・12）

句 A 門を出れば我も行人秋のくれ

句 B 門を出て故人に逢ぬ秋暮

○ ま と め

田中冬二は『珊瑚集』や『月下の一群』に学び、穩かに郷愁の世界を描いたが、モダニズムやシュールの洗礼を

受け、刺戟されて、前衛的な短詩、短章を書いた。一旦は成功したかに見えたが、それは錯覚のようなものであった。

その錯覚から目覚めさせたのが俳句である。なかんずく、朔太郎を通路として接近した蕪村であった。同じように短く、簡潔な表現でも、俳諧の伝統を自らの財産とした時、ようやく独自のポエジイの展開に成功した。詩と俳句を書き続けた半世紀、俳句を詩のデッサンにという一時期もあったが、詩と俳句を内接、外接させるという独自の手法で、自らの詩的世界の深化・拡大した。しかし普通、詩と俳句は同時に鑑賞され、あるいは対照して読まれることは少ない。

冬二は俳句を詩の一行にしながら「自作句を含む詩」、「蕪村句を含む詩」を書いて両者の融合、一体化を試みた。

このことが冬二にあつては、俳句が詩に従属する、あるいは吸収されることは意味しない。この物言いは矛盾する。この矛盾の解決こそが冬二の意図であった。その最も成功した一つの例が「菊の雨」(三―三)であろう。総体としては、やはり試みに終ったというしかない。しかし、たとえ十数篇でもそれらが残されたのは幸いである。

冬二は、ついに敬慕し続けた蕪村の「春風馬堤曲」や「澱河歌」のような作品は残せなかった。しかし冬二は、その方向はしかと見据えていた、と私は思う。『サンングラスの蕪村』と「浄書ノート」(未刊)を読むと、確かにそう言える。次は冬二の、幻の「春風馬堤曲」を見据えたい。

(98・1・13)

基本テキスト

- 『古典俳文学大系12 蕪村集(全)』集英社 一九七二年
『萩原朔太郎全集7』筑摩書房 一九七六年
『田中冬二全集』全三巻 筑摩書房 一九八四〜八五年